

迷うことの諸相

パサージュにおける経験についての考察

森田 團

はじめに

ヴァルター・ベンヤミンの『パサージュ論』は、十九世紀初頭に誕生したパサージュという建築のみならず、この時代の都市文化と都市経験の包括的な分析の試みであった。⁽¹⁾ではなぜそこでパサージュが中心的な役割を果たすことになったのだろうか。それは、この建築が〈通路 Passage〉という形態を核にして形成されていたことに、彼が何かを見出していたからであるように思われる。ベンヤミンにとって、パサージュは十九世紀的な生が刻印された場所だったので、そこに彼はいったい何を見ていたのだろうか。

1 『パサージュ論』の出発点

この問いを探るうえで必要な『パサージュ論』の基本的な構えをまず確かめておきたい。ベンヤミンは、

(1) 本論は、二〇〇八年二月二五日に東京都現代美術館において開催された、川俣正「通路」展内でのUTC P ワークサロン「共生的通路論——ベンヤミンをめぐるセミナー」における発表をもとにしたものである。

十九世紀の資本主義文化が産み出した事物を、その現われの感性的経験という局面に特化して分析しようとした。一九三九年に書かれた梗概のドイツ語草稿では『パサージュ論』の企てについて次のように言われている。

文化という物象化された表象との関連付けによって、新しい、とりわけ商品生産によって規定された生産物と生の形式が——それらは前世紀に帰されるべきものである——、いかにファンタスマゴリーの総体を含み込まれるかを叙述することが、この研究の課題である。この生産物が、理論的な加工によってはじめてイデオロギー的に「美化」されるのではなく、いかに無媒介的な現前において感性的に「*unmittelbarer Präsenz sinnlich*」〔美化 *verleihen*〕²⁾されているのかを示さねばならない。このような生産物はファンタスマゴリーとして現われたのである。(V2, 125f) 〔強調引用者〕

ベンヤミンは十九世紀的な事物が感性に対して無媒介的に現前するときの現象相をファンタスマゴリーと呼ぶわけだが、この経験の特権的場所がパサージュであることになる。

『パサージュ論』の独特な観点は、この経験の感性的な局面が、十九世紀には際立って退行的であったと指摘していることに存する。それは幼年期への退行のみならず、人類の太古への退行としても把握されていたが、総じて神話への退行とみなされている。

資本主義はひとつの自然現象であり、この現象とともに夢を伴った眠りがヨーロッパを覆った。そして、この眠りのなかで神話的な諸力が再活性化したのである。(V1, 494 [K1a.8])

ベンヤミンにとって、十九世紀は眠りについた時代なのであり、それゆえその生産物は大衆によって夢見られた外観や形態を取る。その現象の次元を指示するために、「ファンタスマゴリー Phantasmagorie」という語が選ばれたのは、『資本論』における用法を考慮してということばかりではなく、この言葉を構成する *phantasma* という語が、「夢の像」や「幽霊」を意味することを含めてのことであったのは間違いないだろう。ベンヤミンは世界をファンタスマゴリーとして経験することこそが、この時代固有の経験であるとみなしていた。では、この経験の固有性は何によって生じるのだろうか。ここであらかじめ示唆しておけば、それこそが神話や太古という言葉が暗示しているものにはかならない。おそらく、ベンヤミンは、人間と世界との関係が「太古」に最も強力に規定されているという点に、十九世紀の経験の固有性があると考えていた。そして、それこそがパサージュに集約されているのである。

2 迷うことの三つの範例——惑星・迷路・狩猟

ベンヤミンが「集団の夢の家 Traumahäuser des Kollektivs」と呼んだパサージュ、万国博覧会、パノラマ、室内などでは、すべてがあたかも夢のうちでの出来事のように体験されることになる。したがって、『パサージュ論』の中心になるのは、何よりもある種の視覚体験、イメージ体験であることになるのだが、以下で問題にしたいのは、むしろ夢の空間における運動の在り方である。

(2) 以下において、ベンヤミンのテキストは、本文中においても註においても、下記の全集から引用し、ローマ数字によって巻数を、アラビア数字によって分冊数とページ数を指示する。また『パサージュ論』からの引用には、ベンヤミンによって断片に付された整理番号もまた記すこととする。Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schwepenhäuser, Frankfurt am Main 1972-1989.

(3) Vgl. VI,1, 511. [L.1, 3]

ヴァインフリート・メニングハウスは、『パサーージュ論』において十九世紀的な経験の核心とみなされているのは敷居経験であると述べている。⁽⁴⁾ただ、彼は敷居経験を通過儀礼と重ねて捉えることに重点を置いており、敷居のうちで人間がどのように振舞うのかということにあまり注意していない。ただ、そうすると敷居経験の内実が与えられないままになってしまう。この内実こそが迷うことであるように思われる。たしかにベンヤミン自身も迷うことそのものを明示的に主題化しているわけではないし、そこにメニングハウスが迷うことを注視しなかった理由があるろう。しかし、以下では迷うことがパサーージュ体験の核心であるという見通しのもとに、『パサーージュ論』における三つのモチーフからベンヤミンが迷うことをどのように考えていたのかを抽出することを試み、それがいかなる帰結をもたらすことになるのかを追うことにする。

a 惑星

ベンヤミンは、『パサーージュ論』において、比較的頻繁に十九世紀的空間が宇宙を摸していることを示唆している。万国博覧会は商品の「宇宙 *das Universum*」と言われている⁽⁵⁾し、個人がプライベートでくつろぐ室内もまた宇宙に比されている。⁽⁷⁾十九世紀の空間はいわば外界という現実を遮断して、人工的なコスモスを作り出しているのである。ベンヤミンはコスモスという言葉を使うわけではないが、カール・レーヴィットのニーチェ論から、永遠帰帰とは古代のコスモスを現代において取り戻す試みであるという見解を引用している。⁽⁸⁾夢の空間や夢の家と呼ばれるパサーージュが、ひとつの小さなコスモスであるとベンヤミンが考えていたとしても不思議ではないのだ。

「整えられた秩序」を意味するコスモスは、言うまでもなく、古代ギリシアにおける世界観・宇宙観を代表する言葉である。整えられた秩序とは調和した秩序でもあるが、そのとき調和しているのは、ミクロコスモスとマクロコスモスにはかならない。アリストテレスの『形而上学』にも、天体の運行と現象との関係に

言及した箇所があり、ペンヤミンもよく読んでいたパッハオーフェンは、そのアリストテレスの箇所を参照しながら、天体の運行が諸現象を産み出すという思想が古代の根源的思考だと述べている。⁽⁹⁾ そのときマクロコスモスとミクロコスモスはたんに照応的に調和するのではない。後者が前者を摸倣することによって、両者は照応し、調和するのである。⁽¹⁰⁾

ところで惑星は、見かけ上、軌道に沿って進むようには見えず、いったりきたりしながら移動する。惑星の語源はこの観察に基づいている。Planet は、ギリシア語 *planētēs* に由来し、その意味は迷う、彷徨うことなのである。そのとき、とりわけ注目すべきは、迷うというギリシア語が *planō* という中動態のかたちを取ることである。中動態は、主語の行為が主語自身に回帰することを再帰代名詞を使わず人称変化の語尾だけで示すかたちであり、現在の印欧語では、再帰代名詞を用いて表現されるある特定の事態を中動態に対応させることができる。⁽¹¹⁾

- (4) Vgl. Winfried Menninghaus, *Schuelenkunde. Walter Benjamins Passage des Mythos*, Frankfurt am Main 1986, S. 8 f. [邦訳 ヴィンフリート・メニングハウス 『敷居学——メンヤミンの神話のバサージヤ』(伊藤秀一訳)、現代思潮新社、二〇〇〇年、八一—〇頁参照]
- (5) Vgl. *ibenda*, S. 48 ff. [邦訳、八三—八八頁参照]
- (6) Vgl. VI, 1, 51.
- (7) Vgl. VI, 1, 52.
- (8) Vgl. VI, 1, 174. [D 8 a, 4]
- (9) Johan Jakob Bachofen, *Versuch über die Göttersymbolik der Alten, Gesammelte Werke* Bd. IV, in Verbindung mit Harald Fuhs und Karl Meuli, hrsg. von Ernst Howald, Basel 1954, S. 333. [邦訳、J・J・バハオーフェン 『古代墳墓象徴試論』(平田公夫・吉原達也訳)、作品社、二〇〇四年、三九九頁参照] またアリストテレス 『形而上学下』(出隆訳)、岩波文庫、一九六一年、一五八—一五九頁 [Metaphysik, 1074 a 1, 17] も参照の「J」。
- (10) Vgl. Walter Kranz, *Kosmos, Archai für Begriffsgeschichte. Bausteine zu einem historischen Wörterbuch der Philosophie*, hrsg. von Erich Rothacker, Bd. 2, Teil 1 und 2, Bonn 1958, S. 17.
- (11) Vgl. Philippe Eberhard, *The Middle Voice in Gadamer's Hermeneutics. A Basic Interpretation with Some Theological Implications*, Tübingen 2004, p. 12 f.

通常、この態は主語による行為が自らに及ぶことを表示すると説明されている。ここで前提となっているのは能動性と受動性の対であるが、エミール・パンヴェニストは、能動態と本来対立することになるのは、受動態ではなく、中動態であると述べる。

能動態において動詞は、主語から発し、主語の外部で完結する過程を表わす。逆に定義されるべき態である中動態において動詞は、主語が座「le siège」であるような過程を示す。主語は過程の内部に存するのである。

主語が動詞によって表示されるような過程の場となる事例のひとつとして迷うことを考えることができる。実際、散歩することを意味するフランス語は *se promener* という再帰動詞であり、ドイツ語で迷うことを意味する単語に *verirren* という語があるが、これも *sich verirren* という再帰形を取る。散歩や迷うことは、いかなる目的（語）も持たず、ただ主語がある運動の場となるような出来事なのである。そして、マクロコスモスをミクロコスモスが摸倣するなら、惑星の運動に呼応するのは散歩にほかならないことになる。十九世紀的な空間を宇宙であり、コスモスと見立てるとき、散歩が主要なモチーフとなるのは、このようなことを考えればいわば必然なのである。

b 迷路

ベンヤミンはまた都市を「迷路 Labyrinth」と見立てている。「都市は迷路という古来の人類の夢を実現したものである」(VI, 541 [M.G.a.4])。この迷路に迷い込むのは散歩者にほかならない。迷路の形象は、本来内臓とりわけ腸を形象化したものであることが知られているが、カール・ケレーニイによれば、腸は冥界を表象

しているというのが定説のようである。⁽¹³⁾ 人体がミクロコスモスであるなら、地下世界に相当するのは腸であるというのがその理由とされている。おそらく、このような神話的な結び付きをベンヤミンは知っていた。

内臓のなかにいることで私たちがどれほど安心するかということを知りたい者は、街路を抜けて娼婦のまたぐらによく似た暗闇へとよろめきながらも自らを追い立てねばならない。(VII, 647 [P. 22])

ケレーニイは、迷路と女性器の結び付きを示すいかなる記録も残っていないと指摘しているが、少なくともこの引用は、冥府と内臓との関係、内臓と迷路との関係を念頭に置かなければ理解できない。都市において迷うとは都市が迷路になるということであり、都市が迷路になるとは、それが冥府を孕むことであるとベンヤミンによって考えられていたことは確実なのである。迷うことの本質的な死への近さについては、以下の項でも触れるが、迷路が冥界との深い結び付きを持つことは、ベンヤミンにとっても意義のないことではなかったように思われる。

c 狩猟

迷うことがある種の出来事として生じ、同時にそれが死への近さであることは、迷うことのいわば原現象

- (12) *Ernie Benveniste, Actif et moyen dans le verbe*, in: *Problèmes de linguistique générale I*, Paris 1963, p. 172. 「エミール・バンヴェニスト」、『一般言語学の諸問題』(岸本通夫監訳、河村正夫・木下光一・高塚洋太郎・花輪光・矢島猷三共訳)、みすず書房、一九八三年、一六九頁]
- (13) Vgl. Karl Kerényi, *Labyrinth-Studien. Labyrinthos als Lirnimfles einer mythischen Idee*, in: *Werke in Einzelausgabe*, Bd. I [*Humanistische Setzeforschung*], hrsg. von Karl Kerényi, München/Wien 1966, S. 228 f. 「邦訳、カール・ケレーニイ『迷宮と神話』(種村季弘・藤川芳朗訳)、弘文堂、一九九六年、一三一―一四頁参照]
- (14) Vgl. *ibenda*, S. 229 f. 「邦訳、一五頁参照」]

としてベンヤミンが見出している狩猟において交叉することになる。『パサージュ論』には遊歩と狩猟を関係付けたいくつかの断片がある。そこで両者の共通性として考えられているのが、痕跡を追うという姿勢であった¹⁵。狩猟者は鋭敏な知覚にしか感知されることのないわずかな痕跡に導かれるが、ここでは獲物を狩るという目的は後景に退くことになる。なぜなら、狩猟の成功という結果に至る過程は根本的に迷いに晒されているからだ。遊歩者もまた都市のさまざまな痕跡に導かれることによって都市世界と出会うと言いうことができよう。

迷うことによって開かれる世界は、その最古の相貌をあらわにするだろう。おそらく、このような世界との出会い方は動物と共通する次元を持っている。たとえば、『ベルリンの幼年時代』に「蝶を狩る Schmetterlingsjagd」(一九三三)というエッセイがあるが、そこでベンヤミンは、狩るという行為が引き起こす変化について語っている。

古い狩猟の規約が私たちのあいだ「私と蝶」を支配しはじめた。私自身が全身全霊でその蝶にすり寄りればすり寄るほど、私が内側から蝶のようになればなるほど、それだけ蝶は、そのすべての振る舞いにおいて人間的な決断の色彩を帯びた。最後には蝶を捕らえることが、私が自らの人間存在を再び手に入れることの代償であるかのようにだった。(IV/1, 244)

狩猟という行為のうちで狩る者は狩る対象になるというミメーシスのな体験をする。『ベルリンの幼年時代』には、「ミメーシスの能力について」(一九三三)において展開された摸倣をめぐる思考が、幼年期の具体的な体験に託されたかたちで語られている断片が多くあるが、上の引用はそのひとつである。蝶を狩るには蝶にならなければならない。蝶の世界に入ることではじめて蝶に接近できることになるのだ。このようなミ

メーシスの体験において攪乱されるのは、人間と動物との境界だけではなく、現実と夢との境界でもあるだろう。敷居において迷うとは、最終的にはこのような〈ゆめ〉と〈うつつ〉のあいだを彷徨う体験なのである。迷うことが夢と現実の境界でもあることは、パサーージュが夢の空間とされていることに相応しい。

『パサーージュ論』において話題となる三つのテーマから迷うことの諸相を取り出してきたが、ここでそれらを一貫したものを明らかにしておきたい。迷うことは意志によってコントロールできるものではない。ひとは気付いたときにはすでに迷っているからである。この意味で迷うことは出来事であると言いうことができよう。中動態という文法カテゴリーの意味を通して示唆したように、そもそも迷うこと、彷徨うことは、出来事として捉えられる。事実、中動態が本来表示しようとしたものは出来事であるという学者もいる。¹⁷⁾ また中動態においてももうひとつとなるのは主語が出来事の場合となることであった。それゆえ遊歩の主体は迷うことなのだが、それは何よりも敷居で生起するだろう。

敷居は明確に境界から区別されねばならない。境界とは領域「Zone」なのである。(VII, 618) [O2a.1]

このようにベンヤミンが敷居を解釈したのは、おそらくそこが迷いの場であるからであろう。敷居はたんに踏み越えられる境界ではないのだ。そして、そのとき敷居が接している世界はつねに冥界であることになる。迷うことは、死へと直接繋がらうる場所性と結び付いている。

敷居は、狩りの経験から導き出されたように、夢と現実のあいだの領域でもある。迷うことは現実のさな

(15) たとえば次の断片を参照。Vgl. VI/2, 969. [m. 5, 2]

(16) 「ムンメレーレン」や「隠れ場所」などの断片を参照のこと。Vgl. IV/1, 253 f.; 260 ff.

(17) Vgl. Jan Gonda, *The medium in the Ryūkyū*, Leiden 1979, pp. 1-2.

かで夢見ることとも言えるであろう。ベンヤミンは遊歩における陶醉状態をたびたび強調しているが、それはここから解釈しなおすべきである。以上のことから、パサーージュとは迷いの場所、いやむしろ迷うところに出現するものなのだと言っておこう。

4 根源に至る道——ベンヤミンの方法

夢の空間における運動体験が迷うことであるのは、それが何よりも目的を欠いているからである。ひとは物を取るために手を伸ばし、美術館に行くために歩く。つまり運動は目的を達成するための手段である。それに対して遊歩、あるいは迷うことは、手段・目的関係に規定されている行為から逃れるような行為である。したがって、迷うことにおいては、純粋な手段性が露呈していると言うことができるのだが、実は迷うことが「純粋な手段」であることは、この分析にとって大きな意義を持つ。

「純粋な手段」*reines Mittel* という語は「暴力批判論」(一九二二)で用いられている。¹⁹⁾ベンヤミンにとって手段・目的連関の外部にあるような純粋な手段を見出すことは、その連関に通常位置付けられている行為や事象の根源を探り当てるための方法であった。たとえば、法的暴力は正義の実現という目的のための手段である。この暴力の根源を問うにあたって、ベンヤミンは手段・目的連関の外部にある暴力は何かと問う。そこで探し求められるのが純粋な手段としての暴力であり、その例として挙げられたのが、(たとえば怒りの)顕現としての暴力、さらには神々の顕現という暴力、すなわち神話的暴力であった。²⁰⁾そして、ベンヤミンはこのような暴力をあらゆる暴力の根源であるとみなす。また「言語一般および人間の言語について」(一九一六)では、コミュニケーションという目的に規定されないような言語が問われることで、純粋な手段としての言語の可能性が探究されていた。それが「名」、すなわち彼にとっての根源言語である。²¹⁾

手段—目的連関に規定されている事象の根源——もちろん、この根源は歴史的起源ではない——を、それが孕んでいる純粹な手段性の局面に光を当てることによって浮かび上がらせるといふ方法を、パサージュの考察に適用するとき、まさに手段—目的連関から逃れている迷うという出来事、そしてその場である敷居ないしパサージュに焦点が絞られることになる。上のベンヤミンの所作を考慮すれば、ここでもおそらく純粹な手段としての迷うことにある種の根源性を認めることができよう。

ただ、迷うことそのものが手段—目的連関のなかにある運動の根源にあるとしても、十九世紀固有の経験としての迷うことは、この根源が純粹なかたちで現われたものではないことに注意しておかなければならない。たしかに、パサージュの経験は本質的に迷うことであり、だからこそ十九世紀の経験は太古に根本的に規定されていることになる。しかし、それは根源としての迷うことが、屈折したかたちで現われているにすぎない。とりわけ問題が十九世紀のファンタスマゴリーであるならば、迷うことは擬装され擬似的に現われていると言わねばならぬ。パサージュや都市での迷いは、あくまでファンタスマゴリーという夢の空間——あるいは夢と現実との敷居空間——において人為的に産み出されるものであり、そこには狩猟における迷いが持つ死への危険など存在しない。むしろ、パサージュにおいて迷いが産み出されるのは、迷いによって開かれる世界との出会いの仕方において商品がはじめて魅惑を持つようになるからにはかならない。それはいわば資本主義が仕組んだひとつの罠にすぎないのだ。

(18) たとえば、以下の断片を参照。Vgl. II/1, 525. [M 1, 3]

(19) 「暴力批判論」では、*reine Mittel* という複数形が用いられている。Vgl. II/1, 191.

(20) Vgl. II/1, 195 ff.

(21) 次の箇所手段としての言語の批判から「名」の概念に移行する議論がある。Vgl. II/1, 142 f.

このような留保をつけたうえで、なおやはり迷うことは、『バサージュ論』にとって重要なモチーフであり続ける。それは通路の体験、迷うことの体験が、私たちの生存の根本的な在り方を、歪んだかたちではあれ、映し出しているからのように思われる。通路にせよ道にせよ、それらは世界との根源的な出会い方に関わっている。このことを示唆するには、道がメタファーとして非常に頻繁に用いられるうえ、そのとき道が生に最も緊密に関係付けられることを指摘するだけで充分だろう。道は世界や自然と出会う可能性を切り開くからこそ生のメタファーとなるのではないか。さらにはこう問うこともできる。道が生メタファーになりうるのは、そもそも生そのものが道なるものに本質的に関連おり、具体的な道さえもこの関係に依拠しているのではないか。要するに、道と生のメタファー的な結び付きが道に先行するのではないかと考えることもできよう。

このような問いは、『バサージュ論』の枠組みを大きく越えるようにみえるが、ベンヤミンの考察は、この問いへと歩みを進めるための示唆を与えてくれるのであり、そのかぎりにおいて、彼は十九世紀固有の経験をその根柢から把握したと云うことができるのである。いずれにせよ、上の一連の問題にとって通路なるものを問うことは必要不可欠となる。道は目的地へと達するための移動の手段であるが、かりに通路が迷いの場であり、道に対する純粋な手段とみなすことができるならば、通路は道の根源にあると云うことができるからである。少なくとも道が生まれるやいなや、迷うことは同時に生まれていることは確実であろう。

〈街路 Straße〉が理解されるためには、それはより古い〈道 Weg〉に対比させて輪郭付けられねばならない。街路と道は、その神話的な本性にしたがって、まったく異なるものである。道は道を踏み迷うこ

との不安を伴っている。(V/1, 647) [P. 2. 1]

おそらく、「道を踏み迷うこと」の不安 *die Schrecken des Irigangs* は、潜在的な通路の可能性なのである。

先に述べたように、パサー・ジュとは迷いの場である。そのとき迷うことが生そのものならば、ここにパサー・ジュが迷うことを介して生のメタファーになる可能性を持つことになるだろう。つまり、「道を踏み迷うこと」の不安とは、たんに具体的な道程に伴うものではなく、生そのものに伴っている不安とみなすことができるし、みなすべきなのだ。生が迷いであるという表現には、もちろん宗教的な含意はない。生は出来事であり、死への近さであり、夢と現実の境界にあると言う意味で迷いそのものである。冒頭で指摘したように、ベンヤミンにとってパサー・ジュが十九世紀的な生の刻印であるならば、それが生を表現することができるのは、何よりもパサー・ジュが迷うという体験を核心に持っていたからであろう。

さらに生が潜在的に迷いであるという洞察によって、迷いⅡ生という根源的な状態こそが、実際の道だけではなく、道なるものもまた生み出す母胎になっているのだと言いたくなるが、ここではその可能性を示唆するにとどめたい。道と生とのメタファー的な関係については、もちろんさまざまな角度から考察を深めねばならないが、少なくとも両者にとって迷うことが極めて重要な役割を演じているという認識は、上の関係を考えるとときの大きな手掛りとなるだろう。

おわりに——十九世紀の救出

最後にベンヤミンが迷うことに見出した歴史哲学的な意義を示唆することによって、迷うことが『パサー・ジュ論』の枠組みのなかでいかに解釈されるのか示唆しておきたい。パサー・ジュにおいて十九世紀的な体験

が結晶するならば、その最も重要な局面は迷うことであるように思われる。パサージュは資本主義的な生産手段が支配する社会の最前線であったのであり、そこで商品の新しさに眩惑されるという経験は迷うことを前提にしているからだ。たしかに、ベンヤミンはそこに批判的な眼差しを向けているのだが、同時に十九世紀とはそのような経験に根柢から規定されているのであり、この経験の外部はいわば存在しない。したがって、迷いつつ商品に眩惑されるという経験にイデオロギー批判を向けても意味はないのである。ベンヤミンもこのことを充分に意識していた。彼が試みようとしたのは、このような経験の批判ではなく、「救出 Rettung」だったからである。救出とは極めてベンヤミン的な概念であり、最早その内実について論じる紙幅は残っていないが、ここでは十九世紀的なものをそれが最も十九世紀的である点において、それが孕んでいる意味を反転させる試みであると言っておきたい。この反転の試みは、『パサージュ論』では「弁証法的転覆 dialektischer Umschlag」や「目覚め Erwachen」と呼ばれている。²²⁾

『パサージュ論』において救出の対象のひとつとなっているのがパサージュの経験であり、遊歩であるならば、それは何よりもその核心に迷うことが存するからであろう。目覚めへとひとはまっすぐに向かっていくのではない。むしろ、目覚めは、迷うという段階を必然的に通過するのではないだろうか。転覆や目覚めの過程にとって、おそらく迷うことは必要不可欠なのである。迷うことと目覚めとの関連を究明することは、曖昧なままにとどまっているベンヤミンの歴史認識の理論を解明するための最初の作業になるに違いない。

(22) Vgl. VI, 490 f. [K. I, K. I, 3]